

どうやらモブになるよ  
うです

おおぞら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

可笑しな転生特典を貰いONE PIECEの世界に転生してしまった。

数々の強者や死亡フラグを避けるために、努力するが（周りの）勘違いやすれ違いの  
おかげでどんどん事態は急変していく。

# 目 次

俺は5億の男だ!!

うつかりミスは命に関わるそうです。

12

1

プロローグ

27



# 俺は5億の男だ!!

## 転生特典。

この言葉は最近ラノベやアニメなどでよくお馴染みの言葉。死後に新たな生に生まれ変わる輪廻転生する際に、神様から便利<sup>特典</sup>能力を貰つて転生するという意味である。

転生特典の代表的なものと言えば、正義の味方の必殺技である無限の剣製や裸エプロン先輩でお馴染みの大嘘憑きなどの『特殊能力』や、尽きることない無限の魔力や傷付く事がない無敵の肉体などハイスペックな『ポテンシャル』。

例を挙げれば切りがなく、使い方間違えれば危険は大きいが、普通の人よりも可能性を広げることが出来る夢のようなシステム。

新たな世界で転生特典を使い第2の人生で可愛い女の子と関係を持ちハーレムを作れるもよし、圧倒的な力で人や生物をすべて支配するもよし、誰かのために人助けするのもよし、使わずに穏やかに平和に暮らすもよし。

使い方は人それぞれ自由であり。分かりやすく言えば、一発逆転可能な宝くじやチートと呼ばれるもの。

2 俺は5億の男だ!!

そう。

人生大成功の当たりくじに、夢が無限に広がるチート。  
だから。  
だから。

「君の転生特典は『ネタキヤラ転生』だ!!」

よし！爺さん<sup>神様</sup>まずは一発殴らせろ。

☆☆☆☆

目が覚めた少年は宇宙空間にいた。

星々のように光る光点は無数に存在し、全てを吸い込んでしまいそうな真っ黒が広  
がつていて――いや、ここは宇宙空間ではない。その言葉が、意味が、ここを

表すにはもつとも近いだけで、ここは宇宙空間などとはまったく違う空間。

「ツ!!」

直感的にここが宇宙ではないと悟りながらも、その神秘的な景色に見入ること数刻。落ち着き始めた少年が現状の確認をしようと周りを見回すと、この空間には不自然な存在がポツリ、と立っていた。

場違いな不自然さを醸し出す存在は人間の、それも高齢の老人に見えた。

身長は170cm程で見た目の割には背が高く、宇宙服などではなく真っ白なローブを着こなし、癖の一つない真っ直ぐな白銀の長髪を生やし、顔立ちはしわが多いが優しげな陽の光のような温かさが感じられる顔立ち。

困惑している少年に対して老人はゆっくりと自身が神であることを告げた。

その内容は現実離れしたもので、おとぎ話のようなもので簡単には信じることが出来るものではなかつたが、少年は嘘偽りではない真実だと不思議と感じられ、老人の言葉に耳を傾けていた。

すべてを話し終えた老人は、自身の死を受け入れた少年に対して提案を持ちかける。その提案とは少年に新たな世界に特典を貰い転生してみないか、と言うものであつた。

その提案に悩んだ末、少年は新たな世界に生きる決断をする。

#### 4 俺は5億の男だ!!

それは、そこに新たな光を感じたから。

少年が進む未来の先に待ち受けるものは希望か絶望か。  
少年の新たな人生が幕を上げる。

「どこに話しかけているんだ、爺さん？頭大丈夫か？」

「お主失礼じやのお？わしは誰にでも簡単に今までの流れが分かりやすいように、ナ  
レーションしてやつたのじやよ」

「いやいや、なに『当然分かるだろ？』みたいに首傾げながら答えてんの！誰も居ないの  
に急に振り返つて、話し始めた爺さんの意味不明な行動を理解しようと？」  
(それ何て無理ゲー？ぼけるのも大概にしてほしいな)

「言葉に出せばよいのに先程から心の中だけで呴きおつて。ぼけるつて、わしは永遠を生きる神じやよ？そんなのとつくに過ぎどるわい！！」

「過ぎてるのかよ！あと、心を覗く行為禁止！ダメ！絶対！プライバシーの侵害！」

「ふふふ、残念でしたー！プライバシーの侵害は人間だけの法律で、人間以外のわしのような神や死人には適応されません！残念じやのお笑」

「『笑』とか口に出して言うなよ！性格最悪だな！」

（このクソ爺！…………神は神でも貧乏神や暗黒神じやないのか？）

「お！当たりじやよ！わしは性格上その二つの資質も備えておる。よく分かつたなお主。」

「備わつておるのかよ！じやあ、さつきの性格最悪つて言葉は——」

「褒め言葉じやよ!!」

「もうやだ、こいつ!!」

「お主、うるさいの…………わしだつて忙しいのじやよ。全世界を見守る役割を持つわしが1つの世界の、それもたつた一人の人間に割く時間なんてこと本来あるはずもない。それなのにお主に付き合つておるわしに……神を自由気ままに怠惰むさぼる二トなどと一緒にしておるんじやないのか？神をなめるなよ。」

「…………そうか。爺さん神様だつたな。……悪かつたよ、そりやあ忙しい——

「こ、これは、周回して素材集めなきやや！」

「ぜつてえー暇だろがああああああ!!!!」

「それでお主の行く世界じやが——」

「コイツ、何もないように話変えやがった。」

「いちいちツツコミがうるさいの。ちと黙らんか。人の話も聞けんのか・・・ハア」「爺さんにだけは言われたくねえよ！」

「お主の特典である『ネタキヤラ転生』とは、文字通りの特典——」

「・・・・・・もうツツコマなぞ俺は」

「・・・・・・つまらんの。お主が特典ボックスから引いた『ネタキヤラ転生』とは、その世界のすでに存在して居るネタキヤラに転生してもらうというもののじや（特典ボックス？さつき引かされた変なボックスの事か。あれで特典決まつたのか・言われた通りに流されて引いたのは失敗だつたな。他はどんなのが・・・）

「そうじやのお、幻想殺しや王の財宝に悪魔の実なんかも入つておつたぞ」  
「・・・・・・何・・・・だと・・・!!俺は・・・・なんてハズレを引いてしまつたんだ!!」

「お主の転生先は、 ONE PIECEの世界じや！」

「チャンスは！もう一度チャンスはないのか！　ONE PIECEの世界のネタキヤラとか絶対死亡フラグだらけだぞ、それ！」

「チャンスはないの。人生なんて一度きりの欠けがえないもの。じゃからこそ、一度決まつたものは変えることができないのじや。」

「…………霧囲気出すのは良いけど爺さん、俺これから2度目の人生が始まるんだろう…………」

「さあ、2度目の世界で死亡フラグ満載の人生をしつかりと生きて残つて見せよ!!」ボチツ

「あ、おい！爺さん今死亡フラ——」ガコンッ

ボタンを押したことで突然少年の足下に穴が開く。足場を失つた少年は話し終えることなく穴に落ちていった。その落ちる瞬間の少年は畳然とした表情を浮かべていたが、とてもいい笑顔である神様を見たことで、怒りに満ちた声を上げる。

「このクソ爺いいいいいいいいいい！」

☆☆☆☆

(…………暗い、ここどこだ？)

少年次に気がついた時には、さつきほどとは別の空間にいた。  
(周りが何にも見えな——いや、瞼を閉じているからか。)

だんだんと意識はハツキリとしてきたようだが、力を入れても瞼が開くことはなく。他にも手足を動かして調べてみるがその動きはひどく遅かつた。

そんな体の違和感を覚えながらも現状を理解しようと調べる。

(以外に狭い。それに周りは液体で覆われているのか。本当にここはどこだ?あの爺さんもつとましな所に転生させろよ……ん?転生?もしかしてここは母体の——

—)

突然何かに足を掴まれ引っぱられるたことで少年は先程までいた空間から別の温かな光の明るさのある空間に出された。

瞼を閉じていた少年にも関わらず分かる明るさを見ようと、閉じきられて瞼がゆっくりと開いていく。

(眩しい……。この見覚えのある室内に特徴ある衣服を着用した人たちと呼吸するのもお苦しそうな女性。やっぱりこれは産出、俺は今ちよど病院で生れたつてことか。……たしか赤ちゃんは泣かなきや命の危険があつたはず。)

「オンギヤア! オンギヤア!」

少し演技のようにも聞こえるような産声を上げるが、そんなことには気付くこともな

く、周りの大人们は出産の成功に喜び、赤児の誕生を祝い始める。

「おめでとうございますロズワード聖様、マリア宮様。元気な男の子でございます。」

「おお！この子が私たちの子供か！わしに似てたくましく立派な顔立ちをしておる。」

「ふふ、その通りね、あなた。この子は立派になるわ。何たって私たちの子供ですもの。」

（この二人が父さんに母さんか・・・・優しそうで良か――）

「あらあら、この子寝てしまつたわ。」

「泣き疲れたのだろう。お休み\*\*\*\*\*。」

少年は新たな世界に無事に転生することに成功する。

この小さな変化が連鎖していきより大きな変化を生み出す。

未来に待ち受けるは希望か絶望か。

幸せそうに寝ている少年――いや、赤児には知るよしもなかつた。

次に赤児が目を覚ましたのは、出産から数刻過ぎた時のことであつた。

場所は先程と同じ病院の一室でうつすらと消毒液の匂いが漂つてゐる。室内には看

護婦が二人。情報収集のために寝たふりをしたまま看護婦の話に耳を傾ける。

「この赤ちゃんがロズワールド聖とマリア宮のお子様ですか。」

「そうよ。お名前はチャルロス聖とおっしゃるそうよ。」

(俺の新たな名前はチャルロス聖・・・・・チャルロス――ツ!!)

名前をしつかりと覚えようと繰り返していると雷に打たれたかのような衝撃が赤児を襲つた。

『5億ベリーライヽヽヽヽヽ!! 5億で買うえヽヽ!!』

それはどこか遠い日の出来事でありながら、色あせることなく鮮明に映し出されたあるキャラクターにまつわる記憶。名シーン

その名シーンとともに覚えのない原作のチャルロスのプロフィールが頭に浮かぶ。

チャルロス。

その名前のキャラクターは、自身の先祖が大成して得た権力を振りかざすだけの七光り。

顔は不細工、体は不健康、だけど天竜人と地位が高いためやりたい放題。人を撃つて

も罪にはならない、人妻を勝手に嫁宣言で奪つて飽きたら捨てる、政府もお手上げ。

先程の名シーンは、ルフィの友達である人魚のケイミーの人身売買で落札するときに提示した価格宣言で、その容姿や言動に全世界のONE PIECE読者が苛立ちを覚えさせてくれた。

そしてその七光りが主人公であるルフィに殴り飛ばされた時に感じた爽快感は言うまでも無い。

(なるほど。俺はルフィにぶつ飛ばされる天竜人に転生したのか……)

(あのクソ爺、絶対ぶん殴つてやるからなああああああああああああああああ!!!)

# うつかりミスは命に関わるそうです。

少年が転生してチャルロスとしての新たな生を受けてはや五年が経ち、年齢に見合わない落ち着きや聰明さなどから神童と天竜人の間で囁かれるようになつていた。

他の子供たちに比べて圧倒的な速さで立ち方や言葉を覚え、五歳の段階ですでに一般的な成人ほどの学力を有し、言葉遣いに舌足らずなどなく、親の言う事をしつかり守る、日夜図書館で本を読む姿やマリージョア中を駆け回る姿はすでに聖地では見慣れた光景。

だが、そんな神童や天才の姿を妬む天竜人や同年代の子供も精神の成長とともに増えていった。

そんな子供離れした姿に周囲からの期待、興味、切望、嫉妬が高まるなかチャルロス本人は。

(スマーナ、強さ、航海術、歴史、交渉術、マナー。他にも数学、語学、帝王学、医学……やること多すぎて過労死するかもしれない)

自身の将来設計の難易度の高さに絶望していた。

☆☆☆

転生先の混乱や周りの状況を理解出来るほどに精神が落ち着きを取り戻した結果。彼は一つの結論を導き出した。

(アカンはチャルロス。天竜人という圧倒的踏み台要素を持つ一族の生まれで、周りが血統主義一色の頭が腐りきつた連中ばかりの怪しい伏線多数の地雷源・・・・将来滅亡するとしか考えられない。それに、チャルロスなんてルフィに殴られるONEPIECE上位嫌われキャラな上、この世界は幸せが何の前触れもなく無くなるような危険な世界ときた。・・・・生き残るために頑張ろう。)

チャルロスこの時生後二週間。

眠る前の一時の決断であつた。

それからの行動は早かつた。

全身の骨がしつかりと固まつていないので自由に動くことも立つことも出来なかつたため、生れたばかりのチャルロスの姿を一目見ようと集まつた見学者の会話を盗み聞きすることで語学の勉強を行なつた。毎日多くの人集りが出来るため見本となる教本は多く、一ヶ月後には会話の内容を問題なく理解出来るほどに成長していた。

しかし、まだ生後早すぎず立つことが出来なかつたため、本格的な勉強や肉体作りを開始するのはそれから一年後のことであつた。

一人で立つことが出来るほどにまで成長したチャルロスは、初めに文字の書き取り、数学、地理を覚える事から取りかかり、図書館で様々な本を手に取り他にも多くの分野に手を伸ばし、毎日マリージョア中を遊び回り、走るペースや回数を増やして体力作りを行なつた。

一歳の赤児に見合わない不気味な行動であつたが、所為親バカと言えるチャルロスの両親は嬉々として息子のそれを受け入れ、他の者達への優秀な我が子の自慢話としていた。

そんな両親に恵まれた事にもよつてチャルロスは必死に生き残るための勉強や準備を出来ることになつたのである。

勉強という名の情報収集のおかげで様々なことを知り、いくつかの事をすることが出来た。

まず、現在が原作開始23年前であること。

海賊王ゴー・ル・D・ロジャーは死刑されておらず生存中であるため、海賊王の死に際の一言で始まる大海賊時代を向かえていない。

原作では語られないロジャー海賊団や白ひげ海賊団、四皇、海軍、新世界の猛者達の

活躍は大冒険や大活躍は連日新聞で取り上げられ、チャルロスはニュースクリー新聞の愛読者の一人であり、楽しみの一つであった。

他にもドフラミンゴがすでに天竜人ではないこと。

ドフラミンゴとは『天夜叉』の異名を持つ悪のカリスマとして知られ、政府公認の海賊である王下七武海の一人。後に偉大な航路後半の海『新世界』にある王国『ドレスローザ』の国王に就任する。

出生は特殊で元天竜人という異色の経歴。

元は典型的な上級思考の我が儘坊ちやんであつたが、天竜人を辞めてから地獄を見たことで悪の大魔王に成長する。

(大魔王に覚醒する前に出会うことが出来れば未来の敵が減つたかもしれない、それに善良な天竜人であるホーミングさんを味方に出来れば世論を変えられたかもしれないのに残念だ。)

彼の父親であるホーミングさんは他の天竜人と違つて人を見下すアホ思想の持ち主ではない人物であり、天竜人の顔役にでもなつてもらえれば、天竜人に對する批判的な世論にも少しは改善になるのではないか、と考えていたチャルロスにとつてこの結果は痛手であった。

天竜人の血統主義の思想教育も幼少の頃より実施されていたが生前、奴隸制度が一般

的なではなく平和や平等を願う社会で生きていたチャルロスには無縁のものであつたため、効果は確認されることなく嫌悪感を抱いていた。

チャルロスは所謂原作介入と言う行為を行なうか悩んだ。

原作をしつているが故にどのような人が死ぬか、またはどれだけの悲しみを味わうか知つていて助けたい。だが、介入するには実力が足りない。さらに、介入すると言うことは自ら渦中に突つ込むことを意味する。

助けたい！・・・でも危険はいやだ、と板挟みに合いチャルロスは一つの約束をした。  
(巻き込まれれば助ける、巻き込まれないならば助けない。)

非情に思える答えであつたが、覚悟も実力もないチャルロスにとつては精一杯の譲歩であつた。

だが、あのこんな転生特典を受けた性格の曲がり固まつた神様に目を付けられているチャルロスが巻き込まれないなんてことはもちろんあるはずがなかつた。

自身で自身の首を絞めていることなど気付くことはないチャルロスは、今まで毎日欠かさず勉強や遊び<sup>駆け</sup>回り、五歳を向かえていた。

そして冒頭に戻る。

☆☆☆☆

月日は流れ早5年。原作開始17年前。

アレも生きていく上には必要だ、念のためつて事もあるからこつちも勉強しておくか、と考え片端から手を付けていたためにチャルロスの学習範囲は膨大なものとなり、その膨大すぎる学習量に苦しめられていた。

その過度すぎる勉強量を幼少期から永遠とやり遂げる行為は、到底人間には出来ないような計画であつたが、才能故か、元のスペックが高いためか、その内容をきつちり理解して覚えてしまってタチの悪い。

そのため、俺勉強しなきや→意外に簡単?→増やすか→やればやるだけ覚えられるぞ!→こつちも勉強するか、という風に地獄エンドレスになつたため、学習範囲は終わりなく広がつていき、今では大人顔負けの学力が備わるほどになつたのである。

(・・・・・よし!一段落。・・・・行きますか。)

勉強を終え一段落ついていたチャルロスは、図書館の壁時計の時間を見て、本日待ち合わせしている事を思いだし待ち合わせ場所に向かつた。

チャルロスは本日、海軍の将校と面会することになつている。

チャルロスが海軍の、それも将校に面会する理由は、待ち合わせ場所にいるはずの海

軍将校に弟子入りするためである。

五歳を迎えたチャルロスの肉体は十分活発的に動けるまで成長した。

そこでチャルロスは予てから考えていた、本格的な戦闘訓練を行なうことになった。だが、今まで戦闘経験皆無のチャルロス自身では我流の訓練となるため、それならいつそう戦闘のプロフェッショナルである海軍に鍛えてもらおう、と考えた為である。

ここまでチャルロスが力を欲する理由は二つ。

原作介入するときに役立つ手札の一つとして。

そして、この世界は死亡フラグが蔓延している上、天竜人には優しくない世界だからである。

前者は説明するまでもないが後者は何故か。

一見、天竜人はこの世界の最高権力者で『助けて海軍大将!!』という必殺の呪文も使える強者（笑）の一族。

だが、多くの人から殺したい程怨まれてしたりする。その一部としては、気に入らない国があつた場合、気分気ままにその国の国民全員奴隸におとし、婚約者の奥さんを目の前で奪つて邪魔をすれば発砲と昼ドラ並の行動を行なう。

世界中で怨まれているため、遠くないうちに起きるはずの暴動の際に、身を守るため鍛えなければ命に関わるからである。

(そろそろ待ち合わせ場所か。一体どんな人が師匠になるんだろう・・・・)

☆☆☆☆

チャルロスの住むマリージョアよりさほど離れていない場所に建つ要塞の廊下を気怠そうに歩く人物がいた。

背丈は高く、掛けている丸いレンズのグラサンと頭に載せたアイマスクが特徴的な男性。

(ハア～、眠いし、だるい。働きたくないな～。本部で働き始めてから任務ばかり。さぼつて昼寝したいな～、それかボインなねえちゃんと遊びたいな～。)

おおよそ軍人とは思えないような事を考えつつ、彼は目的地に向けて足を運んでいた。

(ハア～。さつさとこいつを渡して昼寝の続きでもしますか。コングさんからえーと・・・・・・誰かに渡すんだつけ、これを? 昼寝の途中だつたからちやんと聞いてなかつたんだよな～。たしか・・・・上官に渡せとか言つてたような・・・・・・。

・・・・・・・・・・・誰に渡すんだつけ？）

今にも眠りそうな雰囲気の男の一通の手紙が握られていた。

手紙には天竜人チャルロス聖の師事を任せる、と言う旨が書かれた指令書。

彼はこの指令書をとある上官に渡す雑務を任せていたが、その説明を寝ながら聞いていたため、肝心のこの指令書を誰に渡すのか分からなかつたのである。

（ううん 思い出せない。誰に渡すか忘れたけど・・・・俺の上官に渡せばいいか。  
おつ！ちようど良い所に上官発見！）

そう考へ彼は、ちようどこちらに向かつて煎餅食歩いている件の人物を見つけ歩き出した。

ちようどその頃、同じ要塞の一室で彼に指令書を渡すように任せた人物は、熱々のお茶を啜りながら。

（今頃、クザンに持たせた指令書が届くころか。鍛えて欲しいとは可笑しな天竜人もい

たものだな。無碍にも下手も出来ないこのデリケートなこの一件。クザンの上官にあたるセンゴク大将なら大丈夫だろう。もしもこんな案件をあの勝手ばっかりする中将に任せたと思うと・・・・・・ゾツとする。)

と、そもそも手紙の配達人の人選ミスという前提自体に間違いがあることに気付いていない元帥がいた。

☆☆☆☆

まだ見ぬ師匠の事を考えワクワクしながらチャルロスは待ち合わせ場所までやつて来た。待ち合わせ場所は聖地マリージョアの入口。目の前には大海原が広がっている港であった。

年甲斐もなくワクワクしている理由は、師匠となる人の事やこれから教わりたい技が楽しみであるからであつた。その様子はまさに遠足が楽しみで待ちきれない小学生のよう。

(まずは、六式を覚えて月歩で空を駆けてみたい!その後に霸気に挑戦する。霸王色の霸気は資質的に無理だと思うから、それ以外を是非とも覚えたい。見聞色の霸気は生存確率の飛躍のために必修!それ以外にも、いざ戦うとき怖じけたりしないためにもメン

タルを鍛えなきやいけないな。・・・・・やることがこれ以上増えるけど頑張ろう。)  
さらに過労死するかもしれない要因を増やした事に気付きチャルロスは顔を青ざめ  
るが、やらなければ命の危険が将来待っていることを思い出し、もう諦め開き直ること  
でやり遂げる決心をする。

チャルロスが集合場所で待つこと30分。

待ち合わせ場所にお目当ての海軍将校の姿はなくどうしたものか、と待っているチャ  
ルロスに背後から声を掛けられる。

「おまえさんが鍛えて欲しいって頼んできた天竜人か？」

やつと来たのか、と少し苛立ち下な表情を作りかけるが、自身がお願いする立場であ  
ることを思い出し、表情を取り繕い成りながら振り返り――ピタツ、と体を  
強ばらせ動きを止める。

「ん？どうした固まりおつて？わしの顔に何かついとるか？」

「・・・・・・・・・・・いえ、そうでなくて・・・・・えーと、お名前をお伺いし  
てもよろしいですか？」

「わしはガープ、モンキー・D・ガープじゃ！」

その人物の名前は、チャルロスが姿を一目見た時に思い浮かんだ人名と同じであつ  
た。

## モンキー・D・ガーブ。

後に『海軍の英雄』と呼ばれる主人公ルフィの祖父。

原作開始時ではすでに現役を引退しながらも砲弾を手掴みで投げ、直径200メートル級の鉄球をぶん投げることの出来るパワフルなおじいちゃん。ロジャーを追い掛ける事に生涯を懸け、毎度ルパンを追い掛ける錢形警部のような人物。

前世の記憶から目の前の人物がどのような存在かを思い出したチャルロスは冷や汗を流しながらも、ギリギリ表情を保つことに成功していた。

しかし、幼少期からの英才教育により鍛えられたボーカーフエイスにより外面は落ち着いた様子であったが、鉄仮面で覆われて内面は予想外の出来事でパニックに陥っている。

(・・・・え？ なんでこの人ここに居るの？ どうして中将？ 将校は将校でも何で海軍の上から3番目の階級の将校が来るの？ 確かにロジャーは処刑されて居ないけどまだまだ3歳と幼いエースや今年生まれるはずのルフィの面倒は？)

「これからはわしがお主を鍛える。安心せえ!! わしがお主を立派な海兵にしてやる!!」

突然の出来事に対する予想が飛び交い考えがまとまらずパニックに陥っていたが、その有無を言わせない強者の風格や圧倒的なカリスマに感化されたチャルロスは、ガープの言葉を自然と受け入れ、海兵になること目指

---

「目指さないよ!!!何で?!ガープ中将、俺海兵になりませんよ!!」

(ONE PIECE世界で最も多くの死傷者をだし、海賊や革命軍やその他もろもろと最前線で戦うことが仕事である海軍に、無事生き残りたい俺がなるはずがない!!) チャルロスはあまりにも予想外過ぎる一言に動搖が隠しきれずに拒否するが、ガープがそんな抗議を聞き取るはずもなく。

「わしがしつかり鍛えるから大丈夫じゃ!!」

何が大丈夫なのか、とツッコミたかったがチャルロスはそれよりも根本的な問題的の抗議を続けた。チャルロスの直感がここで修正しなければもうチャンスはやつて来ない、と訴えていたからである。

「だ・か・ら・俺は海兵にはなりません!!!話を聞いて下さい、ガープ中将!!」「うむ。修行場所へ行くぞ!!」

「話を聞いてよ!!!!痛い!痛い!!ついていくから首根っこを持ち上げないで!離して下さい!!」

「大丈夫じや、安心せえ。お前は立派な海兵になれる!!」グツ!!

「ここでサムズアップ!? もう歳で話が聞こえてないのか!?」

「まだ若々しい40代じゃ!」ボコッ!!

「いでえ!」

拳骨で殴られた頭を押さえながら追い掛ける。

(40代は若々しいとは言わない!・・・・聞こえてるじやん。ガープ中将はある憎た  
らしい爺さんと同類で、部下が苦労する成長神様人だ!!)

「ほれ、着いたぞ」

「着いたつて・・・ここどこだよ?」

ガープ中将について行つた先に停留していた軍艦に乗り、ついた先はマリージョアか  
ら遠く離れた位置にある無人島であつた。

チャルロスの目の前には緑で覆い尽くされたジャングルが広がつていて、時折鳥の鳴  
き声や猛獸の雄叫びが聞こえてくる。周りを見渡すも他の島の影一つ見えず、海に浮か  
ぶ絶海の孤島であつた。

「ここは人の住んでいない無人島じや」

「無人島なんか——ナンデエリクビヲツカンデイルンデスカ?」

「お主のまず初めの修業は精神と根性の修業じや」

「・・・・・・ん?」

「お主にはこれから一ヶ月間この島で過ごしてもらう！」

「ちょっと待つて、そんなの――」

「安心せえ。食料なら豊富で困ることはないじやろ」

「いや、そうじやなくて」

「ほら行くぞ。口を閉じねば舌を噛むぞ。ふん!!」

「どうい――投げやがああああああああああああああああああ」

首根っこを掴まれたチャルロスは投げられ、放物線を描くように飛んでいった。

風の抵抗をガンガンと受けながらも勢いが止まることはなく、一刻一刻と無人島に近づく。動くすべのないチャルロスには悲鳴をあげることしか出来なかつた。

修行

5歳のこの時からチャルロスの悪夢は始まる。

これからさまざまな無理難題が待ち受けていく、そしてこの出会いこそ彼の人生を大きく変える転換点となつた。

# プロローグ

チャルロスの両親であるロズワールドとマリアの間に新たな子供シャルリアが生れて早一年、チャルロスは6歳になっていた。

一年前にチャルロスが海軍本部の中将に戦闘指導を依頼したことは多くの新聞や記事で報道された。

そのため、ここ数年で神童と呼ばれるほど注目の的となっていたチャルロスの指導をかの有名な海軍の英雄モンキー・D・ガーブが行なう、という話は今までにはなかつた出来事であつたため話題性を呼び、チャルロスの弟子入りは多くの人が知ることとなつていた。

多くの人々はその小さな少年の、自身を鍛えようという心意気に賞賛を送つたが、中には不満の声を上げる者も。

その者たちの主張は、特権階級である天竜人に海軍の英雄と呼ばれているが、元はただの平民出身であるガープが指導を行なうのは失礼ではないか、つまり一言で表すと

『分を弁えよ』というものの。

主張を唱える者の多くは天竜人やその従属である貴族や士官。彼等の建前は、天竜人が平民に教えを請うなど階級支配構造に悪影響を及ぼすから、であつたが本音は、今まで以上に有名になつていくチャルロスが目障りになつてきたからであつた。

中には権力を行使しても依頼を撤回させようとした者たちもいたが、それよりも早くチャルロス本人から、教官にはガープを選ぶという声明が発表された事でいつたん不満の主張は落ち着いた。

教官の問題が解決されからはガープの戦闘指導は本格的に成り、チャルロスとガープの姿は海軍の演習場でも度々見られるようになつた。

明らかに年齢に見合つていらない過酷な訓練であつたが、チャルロスは折れることなくクリアしていき、6歳とは思えないほどの力を着々とつけていく。

一方で戦闘訓練が日々の項目に含まれることになつたにも関わらず、チャルロスの日々の図書館に通う姿や学習量は変ら無いばかりか、新たに航海術に料理など以前よりも学習量は増していた。

その今だ6歳には思えないほどの行動力に精神力。

余りにも年相応でない姿に人々はチャルロスが普通ではなく、大成する存在ではない

のか、と考える者も少なく、さらにあのガーブ中将の弟子という事で将来への期待が更に高まっていた。

だが、期待が高まるとともにチャルロスへの嫉みや恨む者や、その人気が自身の立場を脅かすのではないかと考え快く思わない者達の数は決して少なくはない。

さらに今回、他の天竜人の意見を否定した事でチャルロスと他の天竜人の間には溝が生れることになる。

本来は生れることができなかつたチャルロスの高い知名度に、浅くはない天竜人たちとの溝。

そして

☆☆☆☆

新しいクラスや職場での出会い、見たこともない新天地への出発。

一步成長したような気分になつたり、可愛いあの子やかっこいい子に恋をしたり、無二の友や強い絆で結ばれていく仲間との出会い、新たなことを始めるチャンスであり、今までとは違つた自身になる再スタートの機会。

ドキドキやワクワク、誰もが不安を抱きつつも何か新しい出会いが始まるのではない

か、と期待せんにはいられない、そんな春の季節。

ある島のある国で入学式が行われていた。

その入学式の主役は6歳の子供たち。

彼等は真新しいピカピカの制服を着て、一列に整列している。

慣れない式にじつとしていたらず、キヨロキヨロと興味深そうに回りを見渡している。子供達の表情は誰もが違っていたが、どこか楽しみで堪らない、という瞳をしていた。

学校という共同生活を一度も体験していない彼等が、初めての生活を不安に思いながらも、楽しみで待ち遠しくないわけがなかつた。

だから彼等はうんざりするほど長く、半分も意味が分からぬ学長の有難い話やその他の人の話を聞きながらも、楽しそうな表情を曇らせるることはなかつた。

もちろん、その一列の中にいるチャルロスもその1人で、終始ニコニコ嬉しそうな表情をしていた。

(やつた！授業のおかげでガープさんの修行量が減る!!減るんだ！これで命の危険を感じずぐつすり寝られる日が増える！学校最高!!)

少し理由は他の子供達とは違うが、本当に嬉しそうな顔をしていた。

だが、彼はまだ知らない。

ガーペとの修行は減ったが、内容が今までの2倍、3倍に増える事を。今までの修行がまだましだと思つてしまふことを。

ドキドキ、ワクワクの入学式から一週間。

天竜人であるチャルロスが入学したクラスでは。

「あなたもネコさんがすきなの？」

「うん！ ネコさんだいすき！！」

「みてみて。このバツクかつこいいでしょ！」

「すっげえー、かつこいい！！いいなー」

大好きなネコの話にかつこいい持ち物や昨日見たテレビ番組の話。

新しい環境、クラスに戸惑っていた子供達も雰囲気に慣れ、賑やかになり始めていた。子供達には笑顔が見られ、先生達は新学期の忙しい日常に一段落しホッと一息つく。だが。

チャルロスの姿は、教室になかった。

☆☆☆

町から少し離れた所に立つてある施設の広場。  
そこではたくさんの子供達が遊んでいる。

「いちゃいちゃにいさん・・・・もういいかい？」

「「まあ、だ、だよ！」」

1から順に数字を数える少女の声に対して、子供達は元気よく返事を返す。  
あと7秒。

鬼が動き始めるまでの時間を逆算し、鬼である少女に身体が見えないように身体を屈めながら、チャルロスはそつと隣の草陰に移動する。

「しゃいぐおろおーくうー」

刻々と減っていく時間。

(早く、早く、どこか隠れる場所は・・・)

近づいていくカウントダウンに焦りながら、一刻も早く隠れる場所はないかと辺りを見渡す。

だが見渡すが周りには背丈ほどの草ばかりで、隠れたとしても後ろからは丸見えで直ぐに見つかってしまう。

「ななあー」

あと3秒。

隠れ場所はないかとここそこ移動しているうちに、カウントギリギリで、登れば人が

1人隠れえそうな木の茂みをチャルロスは見つける。

(あそこに逃込めば!)

終了間際に転がって来たチャンスに喜びながら、飛び出し木の麓に目掛けて全力疾走する。

(まだ3秒ある。逃げ切れる!)

子供離れしたチャルロスの身体能力を使えば、木に登るのに必要な時間は1秒。麓に辿り着き、登つて隠れる時間は十分に残っていたため、チャルロスは上手に木の茂みに身を隠すだろう。

だが、それは途中で何も問題が起きなければの話であつた。

「チイツ！」

走つているチャルロスは、反対の方向から向かつてくる人物の姿を見つけ、舌打ちする。

その人物もこのかくれんぼの参加者で、同じように木に向かつて走つている事から、チャルロスと同じ木の茂みのスペースを狙つての行動である事は明白であつた。

しかし、隠れるスペースは1人分しかない。

どちらか1人は隠れられないのだ

相手もチャルロスを見て、このままかち合えばどちらが木に登つて隠れるか決める為に、話し合たり、ジャンケンをするために、時間のロスが生れることに気づく。

この周囲にある身を隠せそうな場所はその木の茂みのみ。先ほどまでいた草まで引

き返したとしても、途中でカウンントを終えた鬼に見つかってしまうので、両者とも引き返すことは出来ない。

知り合つてまだ一週間と短いが反対から迫つて来る相手からどんな答えが返つてくれるか分かつてはいたが念のため、そこを退けと、目つきの悪い少年に合図を送る。

合図は届いたようが、目つきの悪い少年は止まつたり引き返したりするどころか、お前が退け、とばかりに強く睨み返した後、先程よりもギアをあげて駆け続けた。

(だよなー。退かないよな、お前は・・・)

予想合理の反応にやれやれと思いながら、チャルロスも少年と同様に駆けるスピードを限界まで加速させる。

そして。

((・・・じゃあ))

両者力一杯右手を握りしめ、

((お前が退かないなら――――))

強く握り込んだ拳を、

「先につぶして俺が登る!!」

相手の頬に殴りつけた。

「きゅううくじゅううく。もういいかい？」

「「・・・・・」「」

「あれ？」

返事が返つて来ないのを不思議に思った少女は、振り返り様子を確認する。

振り返った先には、かくれんぼで隠れているはずの子供達が隠れて無く、カウントし

終わつた事にも気づかず立つたままある方向を見ていた。彼等が見てゐるその先には。

「てめえが、失せろ！」

「そこを退けえ!!」

文句を言いながら全力で殴り合う2人の少年の姿があつた。

「はあ〜」

あきれるしかない。

何度目だろうか？

こうやつて目つきの悪い兄と孤児院にやつて來た記憶喪失で身寄りのないチャルロスが、喧嘩し合う姿を見るのは一週間の内に見るのは。

(お兄ちゃんとチャルロスの二人が初めて会つたのはつい最近なのに、何で二人とも毎日毎日飽きずに喧嘩しちゃうかな〜。)

「もう！お兄ちゃん、チャルロス、かくれんぼができるから二人とも止めて！」

私の声を聞いて二人ともピッタ、と動きを止め。

「妹の頼みだ、仕方なく止めてやる。よかつたな、負けて恥をかかなくて――

「ラミちゃんの頼みだ、よかつたな、ボロボロになつて妹の前で恥をかかなくて――

――

「——と、思っていたが格の違いを見せてやるよ！」

「——と、思つたが前言撤回、泣いて後悔するなよ！」

一度握った拳が下ろされることはなく、そう言つて二人の殴り合いは再開した。

「はあああ……」

ため息の1つや2つ吐きたくなる。

もう二人の喧嘩は止まりそうにないし、他の子供達も2人の激しい喧嘩をヒーローショーを見るように目を輝かせて見ている。二人に夢中で隠れている子は誰一人おらず、もうこれではかくれんぼどころではない。

「そこだあ！！」

「くらうかあ！！」

開いたチャルロスのボディに兄は右拳を突き出し、その右ストレートをチャルロスは身体を無理矢理捻ることで回避する。

回避を成功した後に動きを止めることなく、チャルロスは左足で兄の顎を蹴り上げ、兄も後ろに倒れそうになるが踏ん張りチャルロスに頭突きをきます。

受けたダメージに体をふらつかせるが、倒れる事なく両者突撃を行う。

チャルロスの右足が兄を襲うが、体をしゃがませ避ける。しゃがんだ姿勢から兄も右膝蹴りで頭を狙うが、チャルロスも頭を後ろに引き、鼻に擦りながらもギリギリ避ける事に成功する。

紙一重で回避したがどちらも手加減なしの暴力の応酬。

すでに二人の服は砂まみれで汚れていて、顔には腫れや傷が何ヵ所かできている。だが二人ともそんな些細な事など気にせず、ただただ真っ直ぐに相手を睨み付けている。

無意識に口角がうつすら上がっている、そんな些細な事など気づかずに。

(むむむ・・・・・そう言えば・・・)

見慣れた二人の喧嘩を見て若干ふてくされた私は、ふと、いつも最後にこの喧嘩がどのように終わるのかを思い出した。

兄とチャルロスの喧嘩がいつも起きるように、この二人の喧嘩をいつも同じようにある人の手によつて止まるのだ。

そろそろやって来るだろう人に思いを馳せていると、あの人の声が聞こえた。

「ふううたあゝりいゝとも、止めなさい!!!」

そんな怒氣の籠もつた若い女性の声と供に、ドゴォンツ!!!と凄まじい衝擊音とともに砂煙が舞い上がる。

そのもくもくと舞い上がる砂煙は、ちようどさつきまで二人が喧嘩していた場所で、「もう! 一人ともいくら元氣があるからと言つても喧嘩はダメです。ここは広場と言つても教会の敷地内ですよ。お祈りしている方もいらつしやるので、叫んだり喧嘩したりせずに遊びなさい。」

そんな若い女性の声もその砂煙の中から聞こえてくる。

だんだんと砂煙が薄れていき、砂煙の中がどうなつてゐるか見えるようになつた。

砂煙が薄れた先には、頭にシユルシユルと煙を立ててゐる丸々大きなたんこぶを作つてうつ伏せに倒れている二人の姿。

そして、その二人の前に仁王立ちして刻々と二人に話し続ける一人のシスターの姿があつた。

「だいだい二人とも、そんなに毎日毎日喧嘩する時間があるのなら、私と一緒にお祈りを捧げましょ。信じる者は救われます。信じれば二人とも喧嘩せずに仲良く成れるは

「です。」

「二人は気を失っているのかピクリとも動かないが、シスターはそんなことなど気にせずに話かけ続ける。

「シスター！シスターだ！！」

「見て見て、キレイなお花！」

子供たちはシスターの姿を見ると、2人の喧嘩など無かつたかのように、我先にと近づき話しかけ。

たちまちシスターは子供達に囲まれてしまう。

「そういえば、もうすぐ三時ですね。みなさん遊びはいつたん止めにしておやつの時間にしましよう。手を洗つて来て下さいね。」

シスターはさつきまでの般若のような顔とは打つて変わつて、優しい笑顔を浮かべていた。

「「「はあゝい！」」」

そのいつもと変らない光景に。

「はああ・・・。やつぱりシスターがお兄ちゃんとチャルロスを止めちゃつた。」

私はあきれたように咳くが、その声色には変らない日々へのうれしさがにじみ出ている。

みんなと遊び、兄とチャルロスが張り合って喧嘩して、シスターが仲裁する。拳骨

これが私の、兄の、チャルロスの——私たちの日常。



これは、ある少年の物語。

どんな光よりも眩しい輝きを放ち、煌々と照らす太陽よりも暖かく、根幹となる余りにも短い1ヶ月。

だが、その価値はどんな黄金にも劣らず、輝きはどんな黄金をも凌駕し、永遠よりも

長く思えた時間。

笑顔があり、涙があり、弱さ、強さ、悔しさ、出会い、記憶、希望、山、嬉しさ、楽しさ、寂しさ、怖さ、怒り、思い、友情、お金、焦り、おまけ、手助け、海、冒険、恋、協力、仲間、幸福、衝撃、嵐、別れ、運命、恐怖、罪、業火、怒号、暴力、咆哮、絶望。

そして――復讐で終わる物語。

☆☆☆☆

そして――――――本来あり得なかつた出会い。

運命は軋み始め、ゆっくりと新たな歯車が動き始めた。

さあ、幕を開けよう。

運命に囚われた少年少女たちとの儚くも美しい、  
幼少期の幕上げだ。